

『ちょっと甘くて意地悪で』

著: 兎月ゆあ

ill: 三尾じゅん太

貴朗の店はレンガ造りの建物で、壁を這う蔦に外壁が殆ど隠れていた。地下へ続く階段の脇には、銀のプレートに深紅のアルファベットで「CORRIDOR(コリドール)」と書かれた看(かん)板(ばん)が掲げられている。

「こ……り…？」

「コリドール。ドイツ語で回廊って意味だ」

「へえ……なるほど」

店の名前をイメージしてか、同様にレンガで造られた階段を間接照明が足元を照らし、まるで秘密の部屋へ繋(つな)がっているような雰囲気を出していた。

開店前でクローズと書かれたプレートのかかった重厚な木のドアを開けると、まず目に入ったのは鬱(うつ)蒼(そう)と茂った観葉植物の目隠しだった。

入ってすぐの会計スペースから、店内が見えないようにしているのだろう。

奥に進むと、バーカウンターといくつかのテーブル席がある。思ったより広く空間がとられた店内は、至るところに緑の植物を配置し、隠(かく)れ家(が)にいるような気分にさせてくれる。

「うわ……」

まだ二十歳にもなっていないので、こんな大人のイメージのある場所へは、初めて足を踏み入れたのだが、あまりに内装の雰囲気がよくて、感嘆の声を上げた。

物珍しげに、きよろきよと見回した紬を、数人のスタッフが迎える。

「あいつが、ここの店長の仁(ひと)志(し)、でこいつが厨房担当の相(さが)良(ら)」

どこか面倒くさそうな貴朗に紹介され、店員が順々に頭を下げていく。

すらりとした立ち姿で、知的な眼鏡をかけた仁志と、反対にがっしりとした筋肉質ないかにも肉体派な雰囲気がある相良。

そして、華奢で中世的な顔立ちが多いフロアスタッフの中で、紬は働くことになった。

「あの……いつまで、ここにいるの？」

さっきからずっと、知りたかったことを訊く。

店まで連れてきてもらったが、てっきり着いたら紬のことは店に任せて、貴朗はすぐに帰ってしまうだろうと思っていたのだ。

「あ？ そんなの、俺が紹介したことになっているんだ。役にも立たない奴を連れてきたって、思われるのも心外だからな。お前の教育も俺がする」

「ええっ！」

さっさと着替えてこいと渡されたのは、制服だという白のワイシャツに、細身のズボン。そして、タブリエエプロンだった。

腰に巻くエプロンは、貧弱な腰回りを強調されてしまうのが気になるが、諦めるしかないのだろう。

とりあえず、それを身に纏った紬の最初の仕事は、この店の接客の基礎を覚えることだった。

今までやったアルバイトは接客業ではなかったもので、最初から使いものになる、とは思ってはいなかったが、慣れない仕事に思いのほか四苦八苦してしまう。

「背筋、伸ばさせて言っただろう！ 下向くなっ」

「は、はいっ！」

まず初めは、歩き方の指導からだった。

「顔を上げろ。不安そうに歩いてんじゃねえよ」

水の入ったガラスのコップを載(の)せたトレイを持ち、カウンターからテーブル席へと歩く度、貴朗の怒号が飛ぶ。

慣れないものを持って歩くだけでも、神経を使うということを、紬は初めて知った。

紬の場合、どうしてもトレイにばかり意識がいき、歩きが覚束なくなるのだ。

かといって歩く方が気になってしまうと、手元が危うくなってコップから溢れた水がトレイを濡らしてしまう。

その度に、バーカウンターの席に座っている貴朗に、注意されてばかりだ。

「……こうやるんだよ」

あまりの紬のできなさ加減に呆れたのか、紬の手元からトレイを取り上げた貴朗が、見本を見せてくれる。

「うわあ……」

開店準備の為、スタッフが忙しく行き交う中を縫うように歩く貴朗は、悔しいがさまになっている。真っ直ぐ前を見て歩く姿は姿勢がいいせいかわ目を引くし、コップ一つ置くのでも、動きが綺麗だと思ってしまった。

「……かっこいい」

手を止めたスタッフの、思わずといった呟きにあまり認めたくなかったが同意見だった。

(……それに比べて、なんだか俺……すごい役立たずだ)

なんで貴朗と同じようにできないのだろうと、開店前のたった数時間で、自分の無力さを自覚させられた。

「ったく。こんな調子だと暫く店に出せねえな。おい、今日はキッチンにでも押し込んでけ」

貴朗は腕時計を確認したあと、舌打ちと共に店長である仁志にそう指示を出して、スツールから立ち上がる。

「誠次が迎えに来るらしいから、それまでは余計な面倒をかけるなよ」

「……はい」

怪我の治療もあるとはいえ、わざわざ峰岸に迎えに来てもらうのは申し訳ないが、どうしようもなかった。

貴朗の車でここまで連れてこられた紬は、マンションまでの道のりがわからないため、一人では帰れないのだ。

貴朗の偉そうな物言いにも、自分の使えなさを痛感したあとでは、刃向かう気になれない。大人しく受け入れた紬に、貴朗はそれ以上話しかけることなく、慌ただしげに店を出て行ってしまった。

「疲れただろう？ 開店までまだ時間あるから、少し休憩しておいで」

貴朗の厳しいレッスンを端で見ていた店長の仁志が、苦笑しながら声をかけてくる。

「——わかりました。」

仁志の促しに従った。

紬はがっくりと肩を落としてスタッフの休憩室に入ると、テーブルの前に置かれていたパイプ椅子に座り深いため息をついた。

「こんなんで、俺ここで本当にやってけるのかな……」

「大丈夫だよ。まあ、初めてだと、あんなもんじゃない？」

いつの間にそこにいたのか、スタッフルームのドアから顔を覗かせた人物が、紬の独り言に伝えてくれる。

先ほど貴朗が紹介したホールスタッフの一人だ。

「あの……えっと」

「ああ、俺はレンね。よろしく」

にこにこと親しげに笑み、名前が出てこなかった紬に改めて名乗ってくれる。

足取りも軽やかに、紬のいるテーブルへ近づく彼は全体的にすらりとしていた。

紬より少し小さいぐらいの、そう変わらない身長に見えるのに、どこか中性的な雰囲気がある。

だからだろうか。数個ボタンを外したシャツから覗く鎖(さ)骨(こつ)が、妙に艶(なまめ)かしかつた。

「ねえねえ、つむつむってオーナーとどんな関係なの？」

「つ、つむつむ？」

聞き慣れない言葉に目を瞬かせた紬は、それが自分の呼び名だと暫くして気づいた。

そんな妙なあだ名で呼ばれること自体が初めてで、どう反応していいものかわからない。だがレンは、にこにことした笑顔を崩さなかった。

「オーナーって、あんまりここに来たりしないんだけどさ。今日は珍しくじゃん？ だから、どんな関係か気になっちゃって」

面食らう紬をよそに、ねえねえと興(きょう)味(み)津(しん)々(しん)な顔のレンは身を乗りだしてくる。

「っ！」

急に間近に迫った綺麗な顔に、紬は仰け反ってしまう。

指通りのよさそうな栗色の髪。大きな目は長い睫(まつげ)に縁取られ、瞬きするだけで風が起きそうぐらいだ。

「なあなあ、どうなんだよ？」

「え……と、知り合いかな？」

貴朗との関係をなんと表していいかわからず、無難なところで誤(ご)魔(ま)化(か)す。

「へえ、そうなんだ。いいなあ、羨(うらや)ましい」

「羨ましい？」

「そうだよー。だって、あの格好いい見た目、優しくて……仕事もできてさ」

(……優しい？ ど、どこが？)

しきりにいいなと羨むレンだったが、貴朗に優しいなんて言葉が当てはまるようには思えなかった。

散々紬に対して怒鳴り、厳しい言葉をぶつけてきた貴朗の、どこが優しいというのだろうか。

「しかも、教育担当はオーナー直々にだなんてさ。全部オーナー好みにするってことだろ？ 本当に羨ましい」

むうっと唇を尖らせて拗(す)ねてみせるレンの姿は、男相手に変だが可愛く見える。  
(うーん……こんな風な子には、優しいのかもしれないな)

担当だの、好みだの。変な言い方が少し気にはなったが、それよりも羨ましいと嘆  
(なげ)くレンを見ると、どれほど自分への態度と差があるのか、とムカムカしてくる。

確かに、これまでの経緯を思いだしたら、優しくなんてできないのかもしれないが、  
紬だって慣れない仕事に戸惑いが大きいのだ。

少しぐらい優しくしてくれたっていいじゃないか。

なんだかそう思ってしまう自分が負けているみたいで、羨ましいなら代わってくれと  
言いたい気持ちを、紬はぐっと呑み込んだ。

本文 p73～80 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>